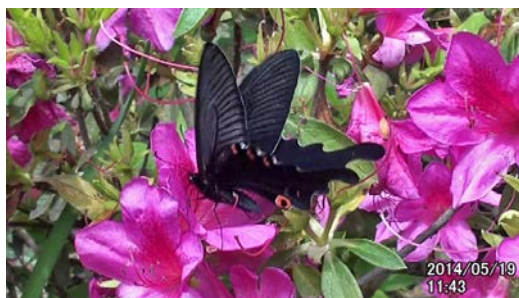


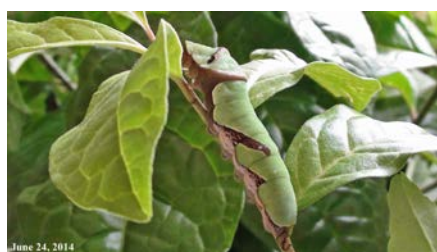
オナガアゲハは北海道から九州まで広く分布するが、本州の中部より南では山地性のチョウとなっていて、その気になって山へと入らないと簡単には出会えない。筆者が初めて本種と出会ったのは高知県大豊村梶が森に遠征した夏のことだったと思うが、確かな記録としては、すでにアルバム標本とした Aug. 23, 1970 兵庫六甲山、というラベルのつく筆者採集の♀個体があり、次いで May 3, 1971: 高知吾北村清水; coll. Biwako Simazaki のラベルがつく、僻地教育に情熱を傾けた亡き父に同行した地で亡き母が採集した♂個体のアルバム標本が残っている。右の記録に見るように、おおむねメス個体の方が大きい。

クロアゲハ、カラスアゲハなどのクロ系アゲハの多くがツツジなどの花蜜を好んで訪れるが、本種は溪流沿いを流れるように、あるいは木陰の多い林縁を縫うように飛びぬけていく光景がよく似合う。そんなわけで、本種の撮影記録が長い間撮れなくて、そのせいもあって出会い記録の執筆を躊躇してきたが、



ついに、May 19, 2014 にツツジの花を訪れたオス個体のビデオ撮影記録が撮れた。撮影地は、幼虫が好むとされるコクサギが溪流沿いに豊富にある兵庫県夢前町山之内というところ。チョウが花を訪れているとき、ゆっくり蜜を吸い続けてくれると撮影が楽なわけで、今回は花蜜が美味しかったのか十分時間をかけてとどまってくれた。この日、このツツジを訪れた他のチョウは、クロアゲハ、カラスアゲハ、ミヤマカラスアゲハ、アオスジアゲハで、少し離れた場所ではモンキアゲハも観察でき、アゲハ類の観察にもってこいの好ポイントに出会えた思い。

2014 年に体験した本種の幼虫がコクサギを好むことを実感できたエピソードを紹介すると、ミヤマカラスアゲハの飼育目的で野外から採取したコクサギに、偶然卵がついていたようで、ある日突然幼虫が姿を見せるというラッキーな展開があり、日本産アゲハ属中もっとも細長いとい



う蛹も目の当たりにできた。なお、終令幼虫はクロアゲハとよく似ているが、おどろいたときに出す嗅角が本種は淡黄色でクロアゲハは赤いという明瞭な区別点がある。